

発見!おごおり遺産

No.8 市内の石材

前は市内の石造物に着目し、それを造る「石工」とその加工に伴う「矢穴」について紹介しました。今回のテーマは石材そのものです。皆さんの身近にある石にはどのような歴史があるのでしょうか。



花立山穴観音古墳の石室入口



現在の稲吉堰



稲吉堰の堤防上に立つ梵字石

市

市内で石が採掘できる可能性があるのは、変成岩と花崗岩で構成される花立山のみです。つまり、市内にあるさまざまな種類の石は、多くが市外から持ち込まれたものと言えます。古くは旧石器時代や縄文時代に矢じりなどの石器として利用された黒曜石は、大分県や長崎県から持ち込まれました。また弥生時代に木の伐採や土地の開墾に使用した石斧には、福岡市西区の今山産玄武岩で作られた製品があります。

市内で大型の石材が利用されたのは、古墳の石室(亡くなった人を埋葬する部屋)を造るようになって以降です。花立山では300基以上の古墳が見つかっていますが、これらは花崗岩を利用した石室を持っていました。その代表でもある花立山穴観音古墳の石材を調査したところ、山で露頭している石と性質が非常に近いことが分かりました。ただし、露頭が小規模で石切場が見つかっていないことや、山中で見つかる花崗岩片は種類が異なることから、修羅(大木や巨石を運ぶそり)や船などを利用して、別の場所から搬入

された可能性も考えられます。

花立山の古墳で、石室が完全な形で残っているのは、先述の穴観音古墳のみで、その他の古墳はほとんどの石が抜かれてしまっています。では、その石はどこに運ばれたのでしょうか。

江戸時代の市内最大の土木工事と言えば、1647年宝満川の稲吉堰の築造です。この工事では、久留米藩の普請奉行丹羽頼母重次の指揮で、「山隈山」から「大石」を下して、「石堰」を築いたことが古文書に記されています。

「山隈山」とは花立山のことで、「大石」とはまさに古墳の石室に使用されていた巨石のことではないでしょうか。堰は現在コンクリート製に造り替えられています。堤防上に保存された梵字石が、わずかに当時の様子を今に伝えていています。

この他にも、花立山の古墳のものとされる石は、前回紹介した薩摩街道干瀨野越堤(市指定史跡)や吹上大通宮の石垣、市内各所の石碑などに見ることができます。簡単に石が手に入らない時代の、人びとの苦勞を感じますね。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと